



認知症ガーデン

上野富紗子&まちにて冒険隊

認知症の人は多くを語らない。
だが「普通」の人たちより、
人間の生きるということの不思議を
ずっとたくさん体験している。
その真実を手にしてている。

ある小さなデイサービスでの、認知症の人たちとスタッフとの
かわりから見えてくる、もうひとつのまなざし。

新曜社

認知症ガーデン



上野富紗子&まちなて冒険隊

新曜社



あおむし と 二丁拳銃^{けんじゅう} … 1
好き か 嫌いか … 8
街 と 「特別区」 … 24
見る こと と 見られる こと … 30
繭^{まゆ} と ウルトラマン … 37
乳房 と 「父の名」 … 44
家 と 繭^{まゆ} … 53
「特別区」 と 繭^{まゆ} … 72
治^{なお}る と 戻^{もど}る そして 変わる … 84
しばる と 解^ときはなつ … 101
共同作戦 と 庭 … 113
おわりに そして はじまりに … 118



あおむしと二丁拳銃^{けんじゆう}

「見てごらん。きれいだよ …」

低い静かな声が後ろの座席から聞こえた。

信号が変わるのを待っていた運転者はちょっと驚いて、信号から眼を離してバックミラーにちらりと眼をやり、後ろの座席で窓の外を見ている秋山宏夫さんのソフト帽の下の横顔を確認した。

中町通りの両側の街路樹に、クリスマス用のイルミネーションがチカチカと瞬^{またた}いている。秋山さんはそれをじっと見ている。言葉は秋山さんの口から発せられたものに違いなかった。

秋山さんが … ? 後ろの席で、クリスマスミラクルが起きている。信号は青に変わったが、眼の中が涙でいっぱいになり、発車するのにちょっと困ったと運転者から後で聞かされた。

秋山さんがうちのデイに初めてきたのは、2年前の11月だった。散歩の途中、キーのついたまま駐車してあった道端のトラックに飛び乗り、蒲田^{かまた}まで行ってしまったという武勇伝の持ち主で、もちろん危険極まりない困った事件には違いないが、そこで軽^{きわ}い接触事故を起こして保護されるまで、50キロメートルも無事故で運転したと聞かされて、なにより驚いた。運転の技術というのは、忘れないものなのだ。

「一日中、ただ歩き回って出口のカギをガチャガチャといじって

いるだけなので、デイサービスではこれ以上は無理ですね」と、いくつかのデイサービスから断られて、うちにやってきた。できれば、認知症専門のデイサービスでなく、普通のデイサービスに行かせたいという、奥様の希望もあってのことだった。

秋山さんは、あまり背は高くない。おしゃれなソフト帽をとると、くりくり坊主頭で、少し前かがみで無表情にせかせか歩く姿は、初めて会った人にはちょっと怖いおじさんと思われるかもしれない。

うちのデイの建物は古い日本建築で、まわり廊下の縁側の角のところ2に段をつけて出入り口にしてある。到着するなり、他の利用者とスタッフが歓談している居間を一べつもせずに通り過ぎ、居間に続くいろりの部屋の、いろりを囲む口の字型のテーブルの横に立つと、秋山さんはズボンのポケットから右手の「指ピストル」を抜いて、初対面の私に無表情で突き付けた。

「あ、銃刀法違反 …」と私が言うと、「許可証持ってるからいいんだよ」と、聞き取れないほど小さな声でつぶやくように言った。

「そうか！ 一本やられた」と本気で感心したが、「それなら、こっちだって …」と、私も右手の「指ピストル」を抜いて彼に向けた。すると、相手は左のピストルも出し、「二丁拳銃^{けんじゅう}」とつぶやく。

「こっちだって」と、私も二丁。今度は相手は両腕で「銃」を抱え、照準器^{しょうじゆんき}に目をあて、「マシンガンだ」と言う。「マシンガンには許可証はない … ね」と、あまり確信は持てないまま言ってみると、相手はあっさり観念して腕を下ろし、逮捕された。

私に左腕を組まれ、抵抗せず居間へ向かった。… が、そのまま、

居間は素通り。まっすぐ廊下の端の出口へ進む。一瞬、「やばい！」と思った。私一人の力で、この人が外へ向かって突進するのを止めることができるのか…？

出入り口の少し手前には小ぶりの四角い木のテーブルがあって、そこでは、到着したばかりの藤田陽子さんが、さっそくいつものように「はらぺこあおむし」のカードの穴にせっせと紐ひもを通していた。

かわいらしいキャラクターのカードと色とりどりの紐ひもが散らかったテーブルのところで秋山さんは立ち止まり、しばらく藤田さんの紐ひも通しを見ていたが、やがて、カードと赤い紐ひもを手にとると、穴に紐ひもを通し始めた。

藤田さんは一回チラッと見たが、手を休めず何の感情も表さず、黙々と穴ひもに紐ひもを通してはその先を結んでいた。小さな四角いテーブルを挟んで、椅子に座った藤田さんと立ったままの秋山さんは、ただ黙々と穴ひもに紐ひもを通していた。初めて会ったばかりの二人の間には、暗黙のうちに、何か二人だけの了解事項でもあるかのような不思議な一体感が漂っていた。

藤田さんは、ご主人と娘さんに連れられて、その2年前にうちのデイサービスを見学にこられた。二人に挟まれて静かにソファに座っていたが、「ほら、ああやって一緒に体操するのよ」と娘さんうながに促されても、顔も体もすっぽりと透明なよろいおおで覆われているかのように、反応はなかった。

その後デイに来ても無表情でただただ歩き回り、カルタにも歌にも興味を示さなかった。というより、人にも物にも興味を持たないようだった。到着するとすぐに、居間の椅子からスックと立ち上が





り、洗面所から「いろいろの部屋」の突き当たりまで、まわり廊下の縁側を姿勢よく何往復も歩く。

あの小さな四角いテーブルは、そんな藤田さんの場所を作ろうと思って、リサイクル屋で見つけてきたものだ。二人用の小さな木のダイニングテーブルで、両側にナプキンやスプーンをしまうための薄い引き出しがあり、その中に「歌うぬり絵の本」と色鉛筆とあおむしのカードをしまった。

それはエリック・カールという人の「はらぺこあおむし」という絵本のキャラクターが描いてある数枚のカードで、その穴に色とりどりの丸紐まるひもを好きなように通して遊ぶものなののだが、それを近くの本屋で見つけたスタッフが、「かわいかったから買っちゃった」と言って、数日前、寄付してくれたものだった。

他の利用者がゲームをしたり談笑したりしている居間のソファとテーブルから、ほんの70センチくらいしか離れていないのだが、その日到着した藤田さんをそこに案内してみると、なぜかそこに座ってそのまま立ち歩くことがなかった。それで、そこが藤田さんの席になった。

その席に座って、引き出しからぬり絵の歌の本を出して歌詞の横にまねして字を書くことと、「はらぺこあおむし」のカードに紐ひもを通すこと、この二つを、毎日の仕事にしようと藤田さんは決めたようだった。

それからも皆の輪に入ることは決してなかったが、ほどなくして、居間で笑い声があがるとちょっとそっちを見て一緒に笑い、またすぐに自分の「日課」に戻るといふ風に日常が変化していった。この



70センチの距離感が、とても快適な様子だった。藤田さんは笑うんだ、とそのとき初めて知った。

そしてまた1年ほどたったある日、藤田さんの机の横をいつものように通り過ぎようとしたとき、藤田さんは、「はらぺこあおむし」のカードからふと目をあげ、こちらの顔を見た。にこっと笑って軽く頭を下げると、藤田さんもとっこり笑ってちょっと頭を下げた。

朝の通学途中で、顔なじみの近所のおばさんとすれ違ったときに交わすような、何気ないごく自然なあいさつだった。何でもないことなのだが、最初ここに来たときの藤田さんを知っている人なら驚いただろう。私も内心驚いていた。

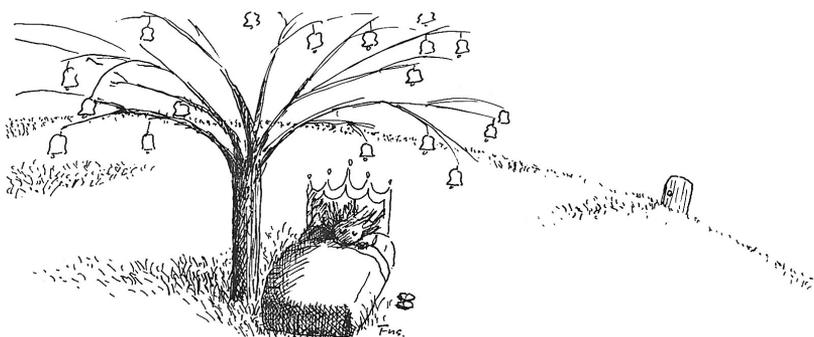
6 | 藤田さんに何か特別な「認知症を改善する脳トレ」をしたわけでもないし、「不安を取り除いてあげるように、やさしく手を握って声かけをし、言うことにひたすら耳を傾ける、『心に寄り添う認知症ケア』」とかを実践したわけでもない。やったことと言えば、思い付きで小さな机を置いたことくらいだった。

そこに座って、自分の日課を決め、毎日せつせとそれをやっていたのは、藤田さん自身だし、しばらくしたら、居間の皆さんのやっていることに興味を向けたのも、藤田さん自身の選択だった。それもマイペースで、面白いと思えば笑うし、それほどでもなければ聞こえていても知らん顔で、日課に集中する。でも、知り合いがそばを通れば、会釈も忘れない。私たちは、藤田さんと普通に接していただけだったのに。

その藤田さんのご主人から、ある日電話があった。「実は・・・」とご主人が口ごもった。

「どうしました？」と少し不安になって尋ねると、「昨日の夜、いつもやっているように掛け布団かけてやったんですけど …、そしたら、ありがとうと言うんです …」と続けた。

あまりに遠慮がちな小さな声で抑揚よくようのない話し方だったので、それが意味することをすぐには理解できず、ちょっと間があってから、「えっ、ほんとうですか！」と大声を出した。藤田さんが3年ぶりに発した言葉が「ありがとう」だったことも、ご主人がそれを電話しらで報せたいほど喜んでいることも、うれしかった。



好き か 嫌い か

月の終わりに開くいつものミーティングの席上で、
「秋山さんにやめてもらうことはできないんですか？」

と一人のスタッフから発言があった。

頭がよく、介護も請求事務もそつなくこなす、頼りになる古くからのスタッフである。その彼女の発言に驚いて、「なんで？」と聞くと、

「せっかくの楽しい雰囲気^{こわ}がいつも壊されちゃうんですよね。皆さんが和気あいあいとカルタやトランプをやっていると、秋山さんが入ってきてカードをめくってしまったたり、前に立ちふさがったり、で、スタッフがその対応に時間を取られていると、盛り上がっていたゲームは中断するし・・・」

うちのデイのやり方に賛同して一緒に仕事をしてきて、介護をよく知っているはずのスタッフの発言に、今度は心底驚いて、

「だって、ここはデイサービスなんだからさ、そんなことあって当たり前でしょうよ。秋山さんだって、一緒にカルタに参加しているつもりなのよ」

と言った。

「秋山さんさえよければ、他の浅野さんや関さんたちはどうでもいいってことですか？」

「そんなことは言っていないけど、ここは、デイなんだからね。町の老人会とかならワキアイアイとかフンイキとかが最優先なんでしょうけど、ここは、秋山さんや藤田さんみたいな人も一緒に居心地よく過ごせる場所を作ろうってことで始めたんだしね。それを、雰囲気こゝろを壊す人は困りますと言って除外するのは、本末転倒でしょ？ 『ルールを守って正しくカルタをやる場所を作りましょう』、と言って作ったわけじゃないんだからね。」

元来短気な私は、言えは言うほど、カッカとしてきた。

「浅野さんや関さんが、イヤだと言ったらどう対応するんですか？」

「浅野さんや関さんがイヤだと言ったの？」

「言ってはいませんが、眉をしかめたり、不愉快な様子は見てわかりますね。」

「浅野さんや関さんは、イヤだとは言わないと思うよ。80年も90年もしっかりと生きてきた人たちだから、秋山さんがそういう行動をする人だということも、ここがどういう場所かということも、ちゃんとわかっているわよ。あなたが考えている以上にね。またいつものが始まったよ。しょうがないねえ … と、受け入れてくれているんだと思うわよ。」

確かに、「ババ抜き」が始まると、秋山さんはテーブルの前に立ち、裏返しに積んであるカードを一枚めくってしまうので、次の番の人は自分のカードが他の人にばれてしまう。

それは、まあ、眉をひそめたくもなるだろう。お正月、トランプを始めると、幼い弟がよちよちと寄ってきて、わかりもしないのに

カードに手を伸ばしたりして、お姉さんたちと喧嘩^{けんか}が始まるという、あの懐かしい^{なつ}光景の再現だ。スタッフは、秋山さんのお気に入りの「大工道具入りのカバン」を持ってきて、そちらに興味をそらせるようにしたり、いろいろ工夫がいるのだ。

浅野さんも、「だめよ！」と本気で怒っている。だが、歌が始まると、秋山さんは、今度は、かつてお座敷遊びで腕をみがいた「小太鼓」をたたいて、絶妙のリズムをとったり、タオルを頭に乘せて美声を張り上げて「函館のひと」を熱唱したりするので、浅野さんも大笑いしながら一緒に歌っている。まあ、きちんとした社交の場とは言いがたいのかもしれないが、こういうのも悪くはない。

「そのほかの人たちでもいいんですけど、もし、秋山さんがいるからイヤだという人がいたら、どうするんですか？」

と、さらに、彼女は言った。

「もしもそういう人がいたら、秋山さんたちも一緒に楽しめるような場所を作りたいんだというこっちの趣旨をよく説明して、それでも、そんな人とは一緒に楽しめません、私には合いませんと言うなら、では申し訳ありませんが、ほかのデイをご紹介しましょう。というしかないでしょ。だって、秋山さんは他に行くところはないけど、その人たちは、いくらでも受け入れてくれるところがあるんだもの。」

「上野さんは藤田さんや秋山さんみたいな人がスキなんですね。」

彼女のゆっくりとした決めゼリフがいやに皮肉っぽく響いて、「スキとかキライとかっていう問題じゃないでしょ！」と大声でキレた。

… が、キレつつ、「ん？ 私、もしかして、藤田さんや秋山さんが好きなの、か …？」と、気持ちはその新しい「表現」の方に動き始めていた。

後日、この話をしていると、「わたし、藤田さんや秋山さん好きですよ」と、スタッフの内田があっけらかんと言った。

私にはちょっとした後ろめたさがあって、こういう具合に素直に「好きです」とは言えない。認知症の人と話をしたり遊んだりしているのは、私には非常に「楽」なのだ。

「人付き合いは疲れるから苦手」な私のような人にとっても、認知症の人との付き合いは苦にならない。それは、もしかすると、世間一般の付き合いというのは、お互いに「見る－見られる」という関係なのに、認知症の人との関係は、「見るけど－見られない」という、変則的な関係だからなのかもしれないと、うすうす思っていたからだった。

「見る－見られる」という緊張感のある関係が面倒で、「見られなくて」済む楽な関係に、逃げ込んでいるだけなんじゃないか、と秘かに自分を疑っているところがあったのだ。これは、後になって、そんな単純な問題ではないぞということがわかってきたのだが、このときは、そう思った。それで、「認知症の人が好きかもしれない」という考えは、なるべく頭の中から追い払ってきた。

と、こんなことを思い巡らせていると、「スキとかキライとかっていう問題じゃないでしょ！」という言葉は、今度は、外からこちらへ向かって飛んでくるような気がする。

それもそうだ。いまや「認知症」は世の人に恐れられる流行りの



「病い」であり、国をあげて対策を講じ、様々な「予防法」や「治療法」がブームにすらなっている。

認知症の人を抱えた家族にとっては、先の見えない混乱の日々が続いているのも事実だ。「スキダキライだと言っている場合か」と言われれば恐縮するほかないが、反面、認知症の人が「ここ」では「好きとか嫌い」とか言われたり、笑いや感動の涙をさそったりする人であるのに、「そこ」では恐れられる悩みの対象の人であるというのは、一体どういうことなのだろうという問いが頭をもたげてくるのを、抑^{おさ}えることができない。

「ここ」と「そこ」では、一体何が、違うのだろう …。

「仕事としてだから、耐えられるのよ」という言葉が返ってきそうだ。これは一面、確かに当たっている。親の介護は、家族関係のやっかいな問題もはらむけれど、仕事としてなら介護できると考えて、私もデイサービスを始めたのだったから、この意見にはまったく同感なのだ。

家族関係が「やっかい」というと、首をかしげる人もいるかもしれない。家族が一番ほっとする関係であり、かけがえのないものだという意見が多いのかもしれない。確かに多くの人にとってそうなのだろう。だが、だからこそ、「やっかい」なものだとも言える。

ずっと、親であり子であり、「〇〇ちゃんはこの子」という親の思い込みや、「お母さんはこうであってほしい」という思いは、長い年月が経っても、いや、経ったからこそ、揺るぎないものになっていて、もしかすると現状を必ずしも反映しない一種の「物語」となってしまっているとも言える。また、それだからこそ、お

互いに大切にしているのだ。

妻と夫の関係というのも、もう少しそれぞれが大人になってから作られた分、距離は保てているが、やはり、お互いに「夫はこういう人なの」という理想や「妻はこうあってほしい」という願いの積み重ねられ方は同じであって、結婚生活が長ければ長いだけ揺るぎない「物語」が構築されている。仲の良い夫婦は仲の良いなりに、仲の悪い夫婦は仲の悪いなりに、それは揺るぎない「物語」になっていると言える。

こうして作られた「親子の物語」「夫婦の物語」は、一旦作られてしまうと強固になり、日々の〈成長＝衰え〉や変化に応じて敏感に内容を変えていく、ということは、次第になくなる。

だからこそ、「家族」という特別の関係はとても安定しており、安心できる場であり、かけがえのないものなのだと言える。子孫を作り、世代をつないでゆくために、「家庭」という一つのシェルターを作るには、このようにして安定性を確保する必要がある。

家族が認知症になるということは、この、揺るぎない関係を根底から揺るがす、大問題なのだ。今まで何十年も、「〇〇な人」としてあった人、「〇〇な人」でなければならないはずの人が、ある日、そうではない誰かになってしまうということ。これは家族にとって受け入れがたい事態なのだ。今まで、形作られていた関係そのものが、否定されてしまうということ。それにもかかわらず、「形」としては前と変わらず一緒に居続けていること。

何十年もかかって形作り、守ってきたシェルターの一角が溶け出してしまうような事態。多くの場合、家族は、溶け出したその一角



を補修しようとし始める。もとの素材で、元のデザインで、なじみ深いあの一角を再現したいと、切に思う。

その他の人間関係であれば、相手が変わってしまったというようなことがあっても、それに応じて、関係を作り直すということ、あるいは、関係を拒否するということは、もう少し簡単にできるだろう。だが、家族という特殊な関係は、「相手ともう一度関係を作り直す」ということが不可能に見えるほど、「安定し」「かけがえのない」ものだったのだ。

堅固^{けんこ}なシェルターを撤収して、何物にも庇護^{ひご}されていない、〈一人と一人〉の裸の関係から始めること。これは、そう簡単なことではない。新しい「物語」を作り始めるなどと悠長なことを言っている間にも、日々の現実、どんどんと変質し、追い越して行く。

秋山さんの奥さんは、ご主人の変化を目の当たりにして、「よし、私が最後まで、この人をみよう」と腹をくくったと、話してくれた。「なぜかという」と奥さんは続けた。

「私が仕事を定年で辞めたとき、若いころからずっと行きたいと思っていたハワイへの語学留学を実行に移したいと思って、主人に言ったの。そしたら、『行ってこい。後のことは引き受けた』と、何も言わずに、送り出してくれたのよ。うれしかったわあ！あの時のことがあるから、この人にどんなことがあっても、そのお返しをしようと思ってね …。」

と穏やかに遠い昔を見るような眼をしながら、語ってくれた。

秋山さんの家に入ると、しゃれた玄関なのに、何も置いてない。宏夫さんが壊^{こわ}したりしてカッとなる事態が生じる前に、壊れやすい

置物は、全部背の届かない高い戸棚に避難してあった。食器や刃物などもキッチンの上の方の戸棚にしまっている。ぶつかっても安全なものだけ、手の届くところに置いてある。

宏夫さんは、ダイニングテーブルの雑誌の上に、予定表とメモ帳を乗せ、置いてあった栓抜きも乗せ、鉛筆とボールペン数本と印鑑ケースをきちんと乗せて、壁際の造りつけの棚に運ぶ。棚の端にそれらを置くと、今度はテーブルの上の新聞をたたんで棚に運び、そこに置く。次に、棚から、さっき運んだメモ帳ほか一式を持ってテーブルに運び、元の場所に置く。続いてたたんだ新聞を持ってテーブルの元の位置に置く。

これを、日中は何度も繰り返す。自分の仕事と決めているようで、根気よくていねいに、ゆっくりとしたペースで繰り返す。

宏夫さんには眠剤がまったく効かないらしい。そこで、奥さんは、ご主人に飲ませるのを止め、寝る時間になると自分が飲んで宏夫さんの部屋のベッドに一人でもぐり込んで眠ってしまうのだという。

一方、眠らない宏夫さんは、隣の奥さんの部屋で、一晩中、タンズやら戸棚やらを全部開けて、中にある奥さんの衣類を引っ張り出して部屋中に散らかすという作業に没頭している。

朝になると、ぐっすり眠ってさわやかな奥さんは「おはよー」と言って自分の部屋に行き、いつものように散らかしてある色とりどりの衣類を端からサクサクとたたんで、元のように引き出しに入れる。これが、毎朝の日課になっている。「洋服はいくら散らかしたってケガしないから安心」と奥さんは笑った。奥さんの豪快さには頭が下がった。

